



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



茶道体験in麻布区民センター

安部 花子

8月14日、麻布区民センターでの茶道講習会に参加しました安部と申します。今までイワン・クパーラなどのロシア文化イベントを中心に参加していたので、日本文化イベントには今回初参加させていただきました。

前回参加したロシア料理教室でロシア人参加者の方々に手厚くおもてなしをしていただき、私も何かロシア人参加者が日本文化を楽しむお手伝いをしたいと思っていたところ、ちょうどよいタイミングで、千葉副会長より「お茶会のお手伝いに来てほしい」とのご連絡が！茶道の知識も経験も全く無しの状態でしたが、裏方として雑用をこなせば役に立てるかも、と軽い気持ちで参加を決めました。

当日現地に集合してみてもびっくり、依頼されたお手伝いの内容は、なんと「お運びさん」。細やかな作法を守りながら抹茶をお出する、お茶会におけるおもてなしの花形です。そうか、お茶会における「お手伝い」とは、こういう役割だったのね…とその時やっと理解しました。これは予習をしておくべきだった…稽古はおろか、ネットで下調べすらしていない状態でのぶっつけ本番。スマホで検索する暇もないまま、今回の客人であるロシア人参加者の方々が続々と和室へ到着します。

いざ、お茶会がスタート。茶道具の使い方、模様に込められた意味などを一通り千葉副会長がレクチャーし、続いてロシア語講師のオクサーナさんがロシア語で通訳します。初心者向けのカジュアルな体験会でしたが、使われている茶



具・点てられる抹茶はもちろんのこと、掛け軸が京都の高名な僧侶の直筆であったり、華道家の方が花を生けてくださったりと、細部へのこだわりが垣間見られ、日本人から見ても本格的で素敵な空間演出でした。

そんな中、いよいよ「お運びさん」デビュー。同じお運びさんとして参加されていた茶道の心得のある方の動きを見様見真似で、先生が点てた抹茶を必死に品よく運んでゆきます。自分のあまりのぎこちなさに恥ずかしくなり、少しうつむきがちになってしまったのですが、客人のお顔をふっと見ると、付け焼刃な私の礼や茶碗を回す動作を

興味深そうに見ながら、写真を撮ったりしてとても楽しそうな様子です。正しい作法でなかったかもしれないけれど、おもてなしをしたいという気持ちが伝わったような気がしてとても嬉しくなり、緊張がほぐれ、こちらもその場の雰囲気を楽しむことができました。

参加者のほとんどの方が抹茶をお代わりされ、お茶会を存分に楽しんでいただけて本当に良かったです。お茶会が終わるとロシア人参加者の方々とも不思議な連帯感が生まれ、連絡先を交換してお友達もできました。もし次回もお茶会に参加できたら、せめて浴衣でも着て客人をもっと楽しませたいと思います。是非リベンジがしたい！

日本人参加者で占められる初心者向けのお茶会よりも、参加のハードルがぐっと下がる日口交流イベントとしてのお茶会は、私のような日本人初心者にとっても非常に参加しやすい貴重な機会でした。イベントを企画・準備をしていただいたスタッフの方々に、この場を借りて感謝申し上げます。お運びさんメンバーの皆様もお疲れ様でした。

お知らせ

●ロシア語クラス生徒募集中！

水曜 初級2 (18:00~19:00) 初級1A-1 (19:05~20:05)

初級1A-2 (20:10~21:10) 土曜 上級 (10:00~11:30)

オンラインクラスは月曜 準中級 (18:00~19:00)

*事務所では少人数で実施し、消毒液、パーテーション等用意して十分配慮はしておりますが、受講の皆様はマスクの着用、換気、手洗い等、感染の予防にご協力お願いいたします。(緊急事態宣言の際は原則オンラインとなります。)

プライベートレッスンも実施しておりますので、ご希望の方はご相談ください。

コルド・ナターリア (初~中級)、イローナ・パルフェノワ (中~上級)、タチヤナ・スニトコ (初~上級)、ウラジーミル・ボロビエフ (初~中級)

*協会事務局までお問い合わせください。

E-Mail: nichiro@nichiro.org Tel: 03-5563-0626

お願い

NPO 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。服部文男氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

*御協力頂いた方に小さなロシア関連グッズを進呈中！
振込先: 郵便口座 00160-9-66486、加入者: 日口交流協会
連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org
Tel: 03-5563-0626 Fax: 03-5563-0752



墨絵体験

千葉 麻里

大使館の方から、墨絵を体験したいという要望があり、7月28日

(水) 渋谷にある国際墨画会の体験教室を申込みました。窓口の斎藤さんはとても親切丁寧に時間や日にちの調整をしてくださり、当日は通りまで出迎えてくれて全員時間通り教室に入ることができました。国際墨画会には海外の方の生徒も大勢通ってきているようで、この日も国際色豊かな顔ぶれで机に向かう様子が見られました。

14時から2時間かけて、筆の持ち方や墨の濃淡の使い分け、竹の幹、枝、葉のそれぞれの筆の動きを教わります。何枚も半紙を使い、墨絵の基礎となる竹の絵を部分練習し、それから全体を描いていきます。

ベテランの水野先生と助手の岩切先生は、一人ひとりの苦手なところを直してくれました。最後に、自分の名前のところに会の印鑑を押してくれて出来上がりです。



以前、大使館に東久留米の松尾柳江先生が長いこと通って墨絵を教えていたことがあります。松尾先生は優雅でモダンな美しい先生で、黒だけでなく色も使って華やかな墨絵の世界を作っていました。時折、展示会をされて生徒さんの作品も展示していたので、大使館の皆さんもそれを楽しみにしておられました。私もよく、きれいな年賀状や展示会のお知らせをいただいたものです。

国際墨画会では、指導者になるまでのクラスがさまざまにあるので、資格まで取りたいと思う方には最適です。体験を終えて、教室のコースの説明を受けたり、入会書もいただいて興味津々で皆さん帰られました。

後日、また斎藤さんからお礼のメールが届き、恐縮してしまいました。またご希望がありましたら伺いたいと思います。またとない良い経験をさせていただきました。温かく迎えてくださった会の皆さん、ありがとうございました。

(副会長)

スターラヤ・ルツサ

畔上 明

モスクワから北上する夜行列車に揺られ、夜明けに到着した古都ノヴゴロド。教会のネギ坊主の数々に圧倒されながらヴォルホフ川に沿ってその日宿泊するホテルに向かう道中、南にイリメニ湖を目にした途端、ふと思いついてスターラヤ・ルツサへ足を運んでみたくなったのです。湖を100km程半周すれば、ノヴゴロドの対岸には作家フョードル・ドストエフスキー(1821-81)が晩年を過ごしたスターラヤ・ルツサに行きつくことに気が付き、同行者たちの賛同を得てバスをそのまま南下させたのです。

筆者にとっての個人的な思い出入れなのですが、現在は専らトルストイに傾倒しているものの中学時代には「罪と罰」を読み、高校に入学するや「カラマーゾフの兄弟」の登場人物の魂の叫びに心奪われたものでした。当時、小さな活字がぎっしり詰まった文庫本はかび臭いような、そして米川正夫氏の翻訳が独特の語り口で不思議なリズムを奏で、それがドストエフスキーの小説にひどく合っているように思えたものでした。そんなイメージを覆すように作家生誕150年の講演会では当時五木寛之が「明るく楽しい」ドストエフスキーと半ば逆説的に唱えたことが記憶に残り、さらに、ロシアを訪れ白夜の運河の街を散策し、そして、生誕180年の秋スターラヤ・ルツサを訪れることとなったことで作品への思いは一層深まっていったのです。

作家の誕生日は旧暦で10月30日、新暦で11月11日、ですから、今年の秋はドストエフスキー生誕200年の記念すべき年でもありますね。



ドストエフスキーが通った聖ゲオルギー教会

湖畔の林を眺めるうちにスターラヤ・ルツサの町が近づいてくるだけで、カラマーゾフの舞台に入り込むような感覚にひたります。ドストエフスキーの通ったゲオルギー教会、緑に塗られた板壁のドストエフスキーの家、庭にはスメルジャコフがなるほどここから誕生したと思える風呂小屋、正に小説のスコトプリゴニーエフスクの世界です。

ドストエフスキーは、十代半ばから二十代にかけてペテルブルクの街の住まいを十六回も移り変わり、シベリア流刑からペテルブルクへと戻ってきた1859年から最期を迎えるクズネーチヌイ市場と並ぶアパートに至るまでやはり十数回の引越し、最初の妻マリヤ(1824-64)が亡くなってから三年経った1867年に再婚したアンナ(1846-1918)とはその直後から四年間ヨーロッパ生活をしていたこともあって彷徨生活が続いています。

ロシアへの帰国の翌年(1872年)から死の前年となる1880年まで毎年夏に鉱泉療養のためそして都会の喧騒から離れた生活を子供たちに体験させようと訪れることになるスターラヤ・ルツサが唯一の安定した生活の場となったのです。

1876年には初めて自分の家を購入したことで、晩年の大作に専念していく環境が整ったといえます。

ジュネーヴで誕生した長女ソフィアは僅か三ヶ月に満たぬ命、四番目の子アリョーシャは1875年スターラヤ・ルツサで誕生したのですが1878年三歳を前にして夭折、夫婦の悲痛は如何ばかりのものであったでしょう。カラマーゾフの三男をアリョーシャという重要な人物に据えてドストエフスキーが最後の大長編に取組んだのはその悲しみの年でした。(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)

オンライン日ロ交流イベント

野元 寿文

9月18日(土)日本語を学ぶロシア人の方とOnlineで会話を
する日露交流イベントに参加しました。

私の参加したグループは、ニジニーノヴゴロドに住むロシア人
の方2名、転勤の為、最近、ロシアで働きだした日本人、ロシア語
留学の経験のあるロシア語堪能な方と私の5名でした。最初に、自
己紹介をして、各自の居住地の事と健康の為に気をつけている
事を話し、また、その会話に潜む嘘を当てるクイズをしました。

ニジニーノヴゴロドは、ロシア第5の都市で、その昔、ニジ
ニー・ノブゴロド公国の首都があった場所との事で、ゴリキー
の故郷。私は、初めてこの都市の存在を知りました。

ロシアの方から「なぜ、日本人は、お腹を冷やす事を嫌がるの
か」と質問され、「日本は、高温多湿で、冷たい飲み物を飲みすぎ
て、お腹を壊す事が良くあるためではないか」と答えたり、
「アイスコーヒーはロシアではあまりなじみがない」といったこ
とをお聞きしました。

ロシアの方は、和食を健康食と認識しておりましたが、日本人
にとって、お寿司や天ぷらは、高カロリーで炭水化物が多い為、
決して、健康食ではないという事をお伝えしました。

私は、普段は、ロシア語の初級クラスで、ロシア人の先生から
ロシア語を教わり、特に、複雑な文法・格変化に格闘していま
す。しかし、この日は、日本語を一生懸命、話そうとする日本語

を勉強中のロシア人の方と接する事が出来、ロシア語を頑張っ
て勉強しようという思いにかられました。また、未知のロシアの都
市や歴史を知ったり、日本人とロシア人の認識の違いに興味深く
感じました。

コロナ禍で自宅で過ごす時が増え、Youtubeでロシア語レッス
ンを視聴したのが約1年前。あれから1年、日露交流イベントに何度
か出席させて頂きましたが、実に大学時代以来、30数年振りに接
するロシア語やロシアの事が、懐かしくもあり、新鮮で、どれも
楽しく、私の知的好奇心を触発させて頂き、異文化の方との交流
をさせて頂いています。今後も、このようなイベントに参加させ
て頂ければ、幸いです。

以前からお世話になっているハバロフスク日本センターの
北村彩乃様から、ロシアで日本語を勉強中の方々とオンライン
で交流する「日本語会話クラブ」に参加しませんか、とい
うお話がありました。今回は2回目で、ニジニー・ノブゴロ
ド日本センターが加わり、一層賑やかになりました。協会の
ロシア語クラスの生徒さん等、多くの方々が参加し、日本語
ロシア語を交えた楽しい有意義な時間を過ごすことができま
した。新しい友人もできたことと思います。北村様、ニジ
ニー・ノブゴロドの中村彌生様、素晴らしい機会をいただ
き、ありがとうございました。(担当)

イワン・マホフと『ろしやのいろは』そして版木のこと

倉田 有佳

『ろしやのいろは』は、ロシア文字や日常挨拶がカタカナ
併記された20頁から成る木版本である。作成者のイワン・マ
ホフは在函館ロシア領事館付属聖堂の読経士(者)で、1859
年、老齡の父ワシーリ・マホフ(在函館ロシア領事館付属聖
堂の初代司祭)と共に着任した。

ゴシケーヴィチ領事のイワンに対する評価は、領事館の中
での立場ははっきりせず、功名心が強く、意志も弱い、とな
かなか手厳しい。ロシアでは外務省の九等文官だったという
イワンは、函館では暇なので、当地で有用なことをやってみ
たいと思っていた。ただし、植物採集や昆虫採集のように他の
館員や専門家によって取り組まれているものではなく、し
かも自分にもできることでなければならなかった。そうした
中で思い付いたのが、子供のための初歩
的なロシア語教本、すなわち『ろしやの
いろは』の作成だった。

版木の製作を引受けたのは、函館在住
の彫師常木重吉だった。イワンは、日本
人にありがちな無精で怠惰な仕事ぶりに
苛立ち、常木の腹の黒さに憤る。

ともあれ日本の新年までに完成させ、
文久元(1861)年正月、百部を函館の子
供たちに、さらに百部ずつを江戸、京
都、長崎の子供たちへの贈り物として函
館奉行に提出するに至った。

ところで、『ろしやのいろは』の版木
の所在については、大正期に岡田健蔵氏
(市立函館図書館(現函館市中央図書

館)の初代館長)が、「レニングラード国立図書館に秘蔵」
されている、と語っている(1918年8月30日『函館日日新
聞』)。だが、近年では、「版木の一部がサンクトペテルブ
ルク市内の博物館にあると伝えられている」(『ガイドブッ
ク 函館の文化財』函館市教育委員会生涯学習部文化財課
編、2003年)と、版木がロシアに残されているとは断言せ
ず、伝聞に留めている。

これが昨年初、ロシア国立図書館が版木を所蔵しているこ
とが確認されたのである(写真)。労をとってくださった在
サンクトペテルブルク飯島総領事には、心から感謝申し上げ
たい。

というのも、函館にとって『ろしやのいろは』は、1962年
に市の有形文化財に指定され、1972年には市制施行50周
年「市民の船」事業で約300名がナホトカ・ハバロフス
クを訪問する際の記念品として限定複製(150部)され
るなど、「日ソ(ロ)友好親善をひもとく歴史的に貴重な
文化遺産」だからである。

ロシア国立図書館所蔵『ろしやのいろは』の木版本の
方は、2007年3月、日露修好150周年記念「ロマノフ王朝
と近代日本」展の函館会場で、函館市所蔵の『ろしやの
いろは』と並べて展示されたことがある(於北海道立函
館美術館)。双方を見比べた時、ロシア所蔵の和綴本の
表紙が色鮮やかで美しく、刷り上がりも鮮明で、保存状
態が良いことに驚かされた。

所在がようやく確認された版木の方も、是非とも函
館で実物を目にしたいものだ。

(ロシア極東連邦総合大学函館校教授)



函館市中央図書館デジタル資
料館、資料番号1810626273-002
~004に該当する部分の版木

コロナ禍のモスクワ: マスクはお嫌い?

西山 美久

日本では風邪予防のためにマスクを着ける人が多い。他方、ロシアではその着用には抵抗感を持つ人が多いと聞いたことがある。

しかし、新型コロナウイルスの世界的拡大によって、マスクへの抵抗感が和らいできている。政府系調査機関の全ロシア世論調査センターが2020年11月に発表した調査結果によると、大多数の国民がマスク着用義務化を肯定的に捉えていた(89%)。また、2020年12月に独立系調査機関レヴァダ・センターがモスクワ市民を対象に実施した世論調査によると、大多数の市民が感染対策としてマスクを着用している(93%)。公共交通機関やショッピングモールなど屋内での着用についても83%が肯定的であった。

モスクワ市内ではコロナ感染者の減少傾向が続いていたが、2021年6月頃から増加に転じ、10月15日には約6600人の新規感染者が確認された。市内を散歩したときに街中をざっと見渡してみると、マスク姿の人は少ない(写真はモスクワの赤の広場、筆者撮影)。コロナ疲れなのか、ワクチン接種済みなのかは分からないが、日本人の感覚からすると「おいおい大丈夫か」と思ってしまう。

この点、ロシア連邦消費者権利保護・福祉監督庁によ



ると、マスク着用は公共交通機関やショッピングモールなど屋内に限られており、屋外での着用は義務ではない。モスクワ市では公共交通機関やショッピングモールなど屋内でのマスク着用がこれまで同様に求められている。違反した場合には罰金が科される。ところが、地下鉄やショッピングモールではマスクを着けずに堂々としている人や、マスクなしで咳き込んでいる人を見かける

ことがあり、同じ空間に居合わせて大丈夫なのかと心配してしまう。マスク姿であっても、鼻を出している人もおり、とりあえず着けたという感じであろう。

モスクワ市では感染者の増加を受け、マスク未着用者の取り締まりが強化されている。インターファクス通信によると、9月初旬の段階で市内の公共交通機関で2万7千件の違反が確認されたという。

なぜマスクを着けないのか。モスクワのニュース番組がマスクなしで地下鉄を利用しようとする男女数人にインタビューを実施したところ、彼らはいずれも「忘れていただけですよ」「急いでいたので間に合いませんでした」などと答え、インタビュアーからの指摘を受けると直ぐにマスクを着けた。コロナの影響でマスクへの抵抗感が和らいでいるようだが、着けたり外したりするのが面倒なのだろうか。(北海道大学)

モスクワ「ムゼイ」巡り・その28

バーチャル版プーシキン美術館(その1)

大矢 温

モスクワで美術館といえば、前回ご紹介したトレチャコフ美術館、そして今回から2回に分けてご紹介するプーシキン美術館が有名だ。トレチャコフ美術館がロシア美術をコレクションしているのに対して、プーシキン美術館は外国の美術品が中心だ。特にこのプーシキン美術館、もともとはモスクワ大学の施設だった(1912年に一般に公開された時の初代館長は詩人のA. ツヴェタエヴァの父親でモスクワ大学教授И. В. ツヴェタエフ)こともあり、他の美術館とは若干趣が違ふ。エジプトで発掘した考古学遺物、それから教材用のギリシア彫刻の石膏像(つまりコピー)など、「美術館」というには抵抗がある「ムゼイ」である。さて、プーシキン美術館のホームページにはバーチャル版が用意してあるので、今回はGoogleではなく、このバーチャル版を使ってご紹介することにす

る。まずは古代エジプトの部屋。このほかにもメソポタミアやギリシアなど豊富な考古学コレクションに驚かされる。その中でも焦点はトロイの遺物。ホメロスの創作と考えられていた古代国家トロイの存在を信じたドイツ人H. シュリーマンが私財を投じてトルコ領内で発掘した貴重な出土品が、第二次世界大戦の戦利品としてソ連に搬入され、長らくその所在が隠されていた後、ソ連崩壊後に一般に公開されたという、いわくつ

きのコレクションだ。窓際に黄金の頭飾りが陳列されているのが見える。

ご存じ、ミロのヴィーナス。このほかミケランジェロのダヴィデ像など有名な作品は一通りそろっているが、上述の通り、これらの彫刻は学習用のコピーだ。

(札幌大学地域共創学群 教授)



プーシキン美術館